

ドーピー建設工業(株) 正員 石黒 如
ドーピー建設工業(株) 松井 敏二

1. まえがき

近年、我が国の橋梁分野においても景観が重視されるようになり、これに伴って、PC斜張橋の建設が飛躍的に増加してきた。しかし、PC斜張橋は、従来のプレストレストコンクリート橋と比べてはるかに高次の不静定構造である上に、コンクリート製の主柱・主塔と鋼製の斜材から成る複合構造でもあるため、設計においては、クリープおよび乾燥収縮による断面力移行量の解析が特に重要な問題となる。その中に含まれる具体的な要因を列挙すれば、以下の通りである。

- 1) 各断面力に対する遅れ弾性歪み係数の違い。
- 2) 部材間のフロー歪み係数の違い。
- 3) 部材間の乾燥収縮度の違い。
- 4) コンクリートの弾性係数の変化。
- 5) 鉄筋、PC鋼材による拘束。
- 6) 繰り返し起きた構造系の変化。

本論文では、これらを総合的に評価する手法として、鉄筋およびPC鋼材の拘束を考慮した変形法による段階的積分法についての算式をまとめ、これを用いてPC斜張橋について数例のクリープ解析を行い、結果を比較した。

2. 解析方法

時刻 t までを n 個の小さな時間間隔 Δt に分割し、各 Δt の部材の変形を $\{\delta\}_i$ とすれば、時刻 t から $t + \Delta t$ までに生じるコンクリートのクリープ変形量 $\{\Delta\delta_c\}$ は、次式で与えられる。但し、 Δt 間のフロー歪み係数を $\Delta\varphi_f$ 、遅れ弾性歪み係数を $\Delta\varphi_d$ 、乾燥収縮度を Δs とする。

$$\{\Delta\delta_c\} = \sum_{i=0}^{n-1} [D]\{\delta\}_i(\Delta\varphi_f + \Delta\varphi_d) + \{S\}\Delta s$$

ここで、部材の両端における断面力と変形は、図-1に示す向きを正とする。また、変位ベクトル $\{\delta\}$ および $[D]$, $\{S\}$ は、以下に示す通り。

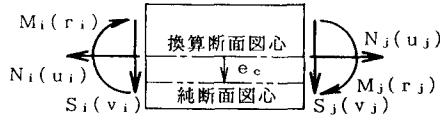


図-1

$$\{\delta\} = \begin{Bmatrix} u_j \\ v_j \\ r_j \\ u_k \\ v_k \\ r_k \end{Bmatrix}, \quad [D] = \begin{bmatrix} 1 & 0 & e_c & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & e_c \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad \{S\} = \begin{Bmatrix} l/2 \\ 0 \\ 0 \\ -l/2 \\ 0 \\ 0 \end{Bmatrix}$$

クリープ移行量を変形法の初期歪み問題として解析することを前提に、このクリープ変形を拘束するために必要な固定端力を $\{\Delta F_{cpa}\}$ とすれば、

† On the creep behaviour of cable stayed prestressed concrete bridges ; by Hitoshi ISHIGURO and Toshiji MATSUI.

$$(\Delta F_{c\text{pa}}) = -\sum_{i=0}^{n-1} [K_c][D](\delta)_i (\Delta \varphi_f + \Delta \varphi_{di}) - [K_c](S)\Delta s$$

但し、これはコンクリートの純断面に対する力であり、 $[K_c]$ はコンクリート純断面についての部材剛性マトリックスを表わす。さらに、この拘束力を解放することによって鋼材換算断面に生じる等価節点力 (ΔF_{so}) は、次式で与えられる。

$$(\Delta F_{so}) = \sum_{i=0}^{n-1} [D]^T [K_c] [D] (\delta)_i (\Delta \varphi_f + \Delta \varphi_{di}) + [D]^T [K_c] (S) \Delta s$$

この等価節点力を全体構造系に作用させることによって、クリープ移行量の不静定分 (F_{s1}) が求められる。尚、 $[D]^T [K_c] [D]$, $[D]^T [K_c] (S)$ をまとめて表わせば、次の通り。

$$[D]^T [K_c] [D] = \begin{bmatrix} \frac{E_c A_c}{l} & 0 & \frac{E_c A_c e_c}{l} & \frac{-E_c A_c}{l} & 0 & \frac{-E_c A_c e_c}{l} \\ 0 & \frac{12 E_c I_c}{l^3} & \frac{6 E_c I_c}{l^2} & 0 & \frac{-12 E_c I_c}{l^3} & \frac{6 E_c I_c}{l^2} \\ \frac{E_c A_c e_c}{l} & \frac{6 E_c I_c}{l^2} & \frac{4 E_c I_c}{l} + \frac{E_c A_c e_c^2}{l} & \frac{-E_c A_c e_c}{l} & \frac{-6 E_c I_c}{l^2} & \frac{2 E_c I_c}{l} + \frac{-E_c A_c e_c^2}{l} \\ \frac{-E_c A_c}{l} & 0 & \frac{-E_c A_c e_c}{l} & \frac{E_c A_c}{l} & 0 & \frac{E_c A_c e_c}{l} \\ 0 & \frac{-12 E_c I_c}{l^3} & \frac{-6 E_c I_c}{l^2} & 0 & \frac{12 E_c I_c}{l^3} & \frac{-6 E_c I_c}{l^2} \\ \frac{-E_c A_c e_c}{l} & \frac{6 E_c I_c}{l^2} & \frac{2 E_c I_c}{l} + \frac{-E_c A_c e_c^2}{l} & \frac{E_c A_c e_c}{l} & \frac{-6 E_c I_c}{l^2} & \frac{4 E_c I_c}{l} + \frac{E_c A_c e_c^2}{l} \end{bmatrix}$$

$$[D]^T [K_c] (S) = \begin{Bmatrix} E_c A_c \\ 0 \\ E_c A_c e_c \\ -E_c A_c \\ 0 \\ -E_c A_c e_c \end{Bmatrix}$$

ところが、各 Δt 間におけるコンクリート純断面に対する断面力の増分を $(\Delta F_c)_i$ とすれば、

$$(\Delta F_c)_i = [K_c][D](\delta)_i$$

従って、固定端力および等価節点力は、次式によりコンクリート純断面に作用する断面力から求められる。但し、コンクリートの4週弹性係数 E_{2s} に対して、 $E_c = K_c E_{2s}$ とする。

$$(\Delta F_{c\text{pa}}) = -K_c \sum_{i=0}^{n-1} (F_c)_i (\Delta \varphi_f + \Delta \varphi_{di}) - [K_c](S)\Delta s$$

$$(\Delta F_{so}) = K_c \sum_{i=0}^{n-1} [D]^T (F_c)_i (\Delta \varphi_f + \Delta \varphi_{di}) + [D]^T [K_c] (S) \Delta s$$

さらに、各 Δt 間の荷重による鋼材換算断面に対する断面力の増分を $(\Delta F_w)_i$ で表わせば、次式が成り立つ。ここまで計算を繰り返すことによって、クリープによる断面力移行量が求められる。

$$(\Delta F_c)_i = (F_{c\text{pa}})_i + [A]((\Delta F_w)_i + (\Delta F_{so})_i + (\Delta F_{s1})_i)$$

但し、図-2 のように、断面には鋼材をm段配置する。また、断面力ベクトル (F) および $[A]$ は、

$$\{F\} = \begin{Bmatrix} N_j \\ S_j \\ M_j \\ N_j \\ S_j \\ M_j \end{Bmatrix}, [A] = \begin{bmatrix} \alpha_c 0 & \beta_c 0 & 0 & 0 \\ 0 & \gamma_c 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \gamma_c 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \alpha_c 0 \\ 0 & 0 & 0 & \beta_c \\ 0 & 0 & 0 & \gamma_c 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

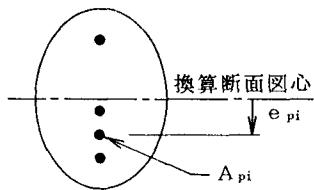


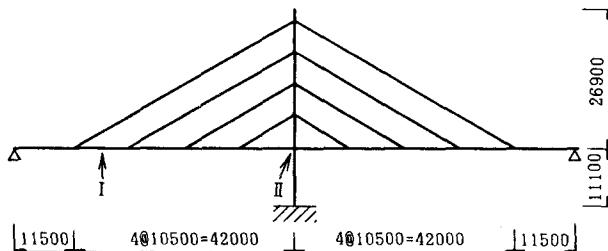
図-2

$$\alpha_c = \frac{A_c}{A}, \quad \beta_c = \frac{A_c e_c}{I}, \quad \gamma_c = \frac{I_c}{I}, \quad n_i = \frac{E_{pi}}{E_c}, \quad A = A_c + \sum_{i=1}^m n_i A_{pi}, \quad I = I_c + A_c e_c + \sum_{i=1}^m n_i (I_{pi} + A_{pi} e_{pi})$$

3. 解析例

支保工上で一括施工した図-3のようなPC斜張橋について、前述の解析方法を用いてクリープ解析を行う。その際、表-2の各項目についての比較を行う。但し、段階的積分における時間間隔については、文献4)の検討結果に基づき、表-1に示す通りとする。

また、コンクリートの弾性係数、フロー歪み係数、遅れ弾性歪み係数、乾燥収縮度は、文献1), 2)による。



$$A_c = 1.9373 \text{ m}^2, \quad y_c' = 0.318 \text{ m}, \quad I_c = 0.1136 \text{ m}^4$$

$$A_p = 0.1052 \text{ m}^2, \quad y_p' = 0.439 \text{ m} \quad (\text{I 断面})$$

$$A_p = 0.0467 \text{ m}^2, \quad y_p' = 0.096 \text{ m} \quad (\text{II 断面})$$

$$A_s = 0.0089 \text{ m}^2, \quad y_s' = 0.249 \text{ m} \quad (\text{D-1})$$

$$A_s = 0.0271 \text{ m}^2, \quad y_s' = 0.249 \text{ m} \quad (\text{D-2})$$

図-3 表-1

	$\log(t)$	t	Δt	計算段階名
$\beta_f(10^8) = 0.380$	0.009	10	-	荷重載荷時
$\beta_f(10^8) = 0.470$	0.053	10	-	i = 1 CASE
$\beta_f(10^8) = 0.025$	0.105	12	-	i = 2 CASE
$\beta_f(10^8) = 0.05$	0.158	14	-	i = 3 CASE
$n_i = \frac{\beta_f}{\beta_f(10^8)} / \Delta t$	0.263	16	-	i = 4 CASE
$1/n_i = 0.053$	0.316	20	-	i = 5 CASE
	0.368	28	-	i = 6 CASE
	0.414	30	-	i = 7 CASE
	0.526	34	-	i = 8 CASE
	0.632	38	-	i = 9 CASE
	0.684	48	-	
	0.737	52	-	
	0.822	56	-	
	0.895	78	-	
	0.947	89	-	
$\beta_f(10^8) = 0.850$	2.000	100	-	i = 10 CASE
$\beta_f(10^8) = 0.470$	2.053	113	-	i = 11 CASE
$\beta_f(10^8) = 0.025$	2.158	144	-	i = 12 CASE
$n_i = \frac{\beta_f}{\beta_f(10^8)} / \Delta t$	2.211	162	-	i = 13 CASE
$1/n_i = 0.053$	2.263	193	-	i = 14 CASE
	2.368	234	-	i = 15 CASE
	2.421	264	-	i = 16 CASE
	2.526	295	-	i = 17 CASE
	2.575	309	-	i = 18 CASE
	2.632	428	-	i = 19 CASE
	2.624	526	-	i = 20 CASE
	2.789	625	-	i = 21 CASE
	2.826	692	-	i = 22 CASE
	2.971	886	-	i = 23 CASE
$\beta_f(10^8) = 1.320$	3.000	1000	-	設計荷重時
$\beta_f(10^8) = 0.325$	3.111	1292	-	
$\beta_f(10^8) = 0.025$	3.222	1568	-	
$\beta_f(10^8) = 0.05$	3.333	2124	-	
$n_i = \frac{\beta_f}{\beta_f(10^8)} / \Delta t$	3.444	2582	-	
$1/n_i = 0.111$	3.667	2642	-	
	3.778	2895	-	
	3.889	3743	-	

表-2

構造	R-TYPE	桁と橋脚が剛結	斜材	S-2	$\phi 26(90/120) \times 2$	鋼材	D-1	P C + 一般的な配筋
	F-TYPE	桁と橋脚が分離		S-4	$\phi 26(90/120) \times 4$		D-2	P C + 全鉄筋 D22
	-	-		S-6	$\phi 26(90/120) \times 6$		-	-

表-2

断面力比 (%)	M_p / M_w		応力度 (kg/cm²)	I 上縁		I 下縁		II 上縁		II 下縁		
	I	II		D-1	D-2	D-1	D-2	D-1	D-2	D-1	D-2	
R-TYPE	S-2	-61	-68	σ_{p2}	23	24	-38	-39	-23	-23	33	32
	S-4	-61	-60	$\sigma_{cpa} + \sigma_{go}$	-10	-21	-19	-20	-11	-19	1	-3
	S-6	-60	-54	σ_{p1}	5	7	-9	-12	1	2	-3	-4
F-TYPE	S-2	-53	39	σ_{p2}	23	24	-38	-39	-11	-10	14	14
	S-4	-56	20	$\sigma_{cpa} + \sigma_{go}$	-10	-21	-19	-20	-20	-30	1	-4
	S-6	-57	12	σ_{p1}	5	7	-9	-13	0	0	0	-1

表-3

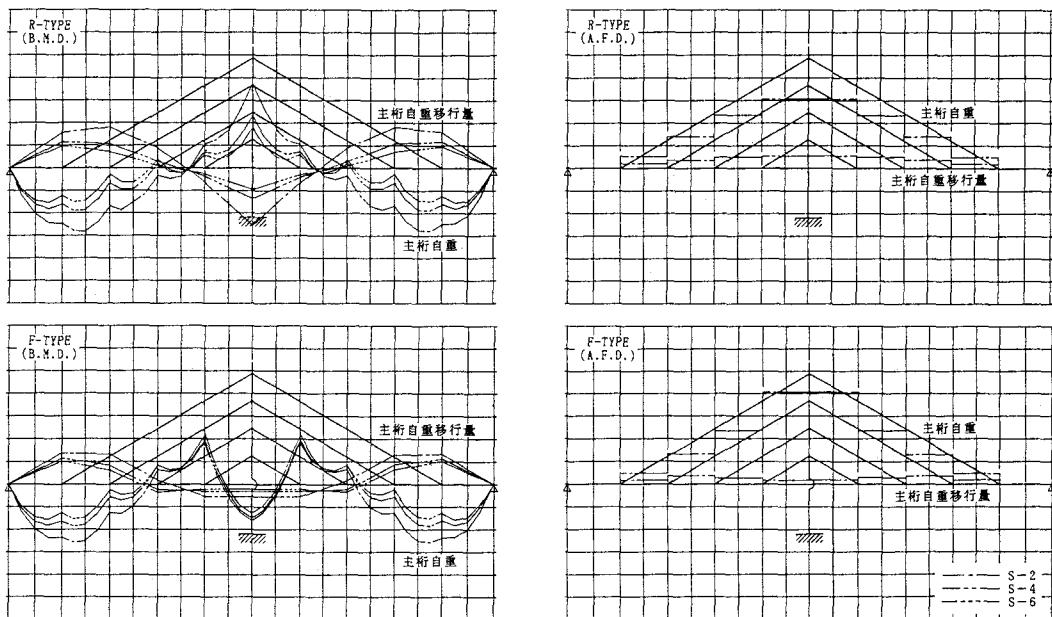


図-4

4.まとめ

解析結果は、表-3および図-4に示す通りである。これらから、PC斜張橋のクリープ特性について、次のことが言える。但し、3径間以上の場合は、さらに検討が必要である。

- 1) 主桁と橋脚を分離構造(フローティング)とした方が、剛結構造とした場合よりもクリープ移行量が小さくなる。しかし、斜材の剛性の変化が移行量に与える影響は逆に大きくなる。
- 2) 鋼材換算断面に作用するクリープ移行量の不静定分だけを見れば、曲げモーメントの移行量の方が軸力の移行量よりも大きく、本例題では荷重によるものの50%を越えている。
- 3) 主桁の剛性に比べて斜材の剛性が大きいほどクリープ移行量が小さく、また剛性の変化が移行量に与える影響も小さくなる。斜材の配置形状の違いについては、さらに検討が必要である。
- 4) 主桁鋼材量はクリープ移行量の不静定分にはあまり影響を与えないが、主桁鋼材量の増加に伴う移行量の静定分の増加は非常に顕著である。これは、コンクリートに対する引張応力の増加、或いはプレストレスの減少を意味しており、実際の設計では注意する必要がある。

5.参考文献

- 1) 道路橋示方書・同解説(I)(III), 日本道路協会, 1990
- 2) コンクリート道路橋設計便覧, 日本道路協会, 1985
- 3) 小宮正久; 酒井一; 前田晴人: 任意形コンクリート構造物のクリープ解析法に関する一提案, プレストレストコンクリート, Mar.1987
- 4) 石黒如: 段階的積分法によるクリープ解析と時間間隔の影響について, 土木学会北海道支部論文集, 1990
- 5) Comité Euro-International du Béton : Structural Effects of Time-dependent Behaviour of Concrete, Georgi Publishing Company, Saint-Saphorin, Switzerland, 1984